

メキシコ・シワタネホと黒潮町の中学校合同津波避難訓練
—シワタネホに見る効果—

Joint Tsunami Evacuation Drill by Junior High Schools of Zihuatanejo, Mexico and Kuroshio, Japan
-Impact for the School in Zihuatanejo-

○中野元太・杉山高志・岩堀卓弥・矢守克也・李勇昕

○Genta NAKANO, Takashi SUGIYAMA, Takuya IWAHORI, Katsuya YAMORI, Fuhsing LEE

The joint tsunami evacuation drill was held with the participation of Eva Samano secondary school located on the pacific coast of Zihuatanejo, Mexico and Saga junior high school located on the pacific coast of Japan, since both schools face a risk of distant tsunami. Generally, in Zihuatanejo, the power structure among disaster experts, teachers and students appear disaster experts as active implementer of disaster education, and teachers and students as passive followers of the education. However, unlike other schools, power structure of Eva Samano appear almost equal among those stakeholders. Therefore, it was analyzed that the differences of the power structure drove to bring the changes of teachers as active implementer of the education after the drill.

1. はじめに

日本とメキシコは太平洋を隔て、遠地津波という共通のリスクを有する。本研究は、メキシコ合衆国太平洋岸のシワタネホ・デ・アスエタ市（以下、シワタネホ）にあるエヴァ・サマノ中学校と、高知県黒潮町佐賀地区にある佐賀中学校とが、遠地津波を想定して2017年7月11日、12日に実施した合同避難訓練について報告する。そして、訓練前は筆者や現地防災局といった専門家が、防災教育を推進しようとの働きかけに消極的にしか応じて来なかったエヴァ・サマノ中学校の教員が、訓練後には主体的に防災に取り組むようになったその理由を、よい意味で、専門家－教員－生徒の三者の間に主と従（能動と受動）の関係が弱かったことにある可能性について考察する。なお、本研究は、JICA-SATREPS プロジェクト「メキシコ沿岸部の巨大地震・津波災害の軽減に向けた総合的研究」の一環で行い、筆者らが両国の中学校で合同津波避難訓練実施を支援した。

2. 専門家と教員との一般的な権力関係

教育は、原理的に、「教える-教えられる」という主・従（能動と受動）の図式を伴っている（例えば矢野，1996を参照されたい）。シワタネホでも、防災局職員（専門家）が防災教育を推進してきたことから、防災局職員は防災を「教える」という形で行為の「主体性」を獲得し、防災教育の受け手である学校の教員は「教えられる」という

形で行為の「客体性(受動性)」を付与されてきた。筆者は防災局職員とともに、シワタネホの12の学校を訪れ防災教育を実践してきたが、主と従の関係がそのまま反映される形で、教員らは筆者らを専門家として迎え、筆者らが希望する通りに授業時間を確保し、専門家の授業を「受け」てくれた。専門家は「主体的」に指導し、学校教員は「受動的」に指導に従ったのである。

3. エヴァ・サマノ中における主と従の関係

しかし、エヴァ・サマノ中学校では、ここで言う主・従の関係について、シワタネホの他の多くの学校とは異なる特徴が観察された。2016年10月、筆者は防災局職員とともにエヴァ・サマノ中学校で学校教員を対象に地震と津波のリスクを説明した。これは他の学校と同様であった。しかし、津波避難ルートを検討や津波避難訓練を共同することを筆者らが提案したところ、他の学校は提案を受け入れたのに対し、エヴァ・サマノ中学校の校長は2012年に行った津波避難訓練を挙げ、「津波避難ルートは既に知っている」、「教員は対応方法を知っている」と述べ、筆者らが防災教育を行うことは不必要だとした。つまり、同中学校は、他の学校群と異なって、筆者ら外部の専門家を主とし、現地の学校を従とする主・従の関係という枠組みにおさまらなかつたのである。このことは否定的にとらえるべきなのか、それとも肯定的にとらえるべきなのだろうか。

この学校では 2012 年の避難訓練以外には防災に取り組んでいなかった。つまり、同中学校は精力的かつ主体的に防災実践を実施しているとは、とても言えない状況にあった。実際、筆者らが佐賀中学校との合同避難訓練を相談した際にも、教員らの消極的な姿勢は維持されていた。使用する教室が他の授業とダブル・ブッキングされていたり、教員同士で情報が共有されないために生徒が来ないという事態が度々起こった。校長に改善を依頼したが、改善されることはなかった。合同訓練の日程も複数回確認していたが、実施の 2 日前に学校行事と日程が重なっていることがわかり、学校行事の変更が急きよなされた。訓練当日も依頼していた機材が用意されておらず、筆者らが学校内で探すことから始めなければならなかった。

これらの事実は、同中学校で主（外部の専門家）と従（同中学校）の関係が成立しなかったことは、教員間にも、「指示・指導する側（校長など）」と「指示・指導される側（一般教員）」との関係性が極めて弱いことの反映であることを示している。同中学校における弱体化した主・従の関係性は、スムーズに防災教育を実施できないという意味で否定的に作用していると結論づけられそうである。

4. 合同避難訓練の実施

しかし、合同避難訓練をめぐる一連の経緯は、このように短絡的に結論づけることは必ずしも適当ではないことを示唆している。

7 月 11 日午前 8 時 30 分、南海トラフでの地震発生を想定し、まず、佐賀中学校が避難訓練を行った。全校生徒がヘルメットをかぶり避難をし、何人かは学校にあるリアカーで避難経路上の高齢者を救助した。避難訓練後に「もうすぐシワタネホに津波が来ます。頑張って避難してください」というメッセージを撮影し、避難訓練の様子を撮影したビデオとともにメキシコへ送信した。

南海トラフで地震が発生した場合、メキシコ太平洋岸には約 24 時間で到達する。佐賀中学校での避難訓練から 23 時間後の 7 月 12 日午前 7 時（メキシコ時間 7 月 11 日午後 5 時）に、佐賀中学校、エヴァ・サマノ中学校の生徒はそれぞれの学校に集合した。エヴァ・サマノ中学校では、佐賀中学校で行われた避難訓練ビデオとメッセージビデオの上映を行った。日本からのメッセージ上映中や避難訓練前などに、「ワーっ」という大きな歓声が上がリ、生徒らがこの訓練に大きなインパクトを

受けている様子が観察された。この光景は何度も見られ、教員や防災局職員らが静かにするよう呼びかけても静まらないときもあり、数分に渡って落ち着くよう呼びかける場面もあった。これは、同中では、教員と生徒の間でも、主・従の関係が相対的に弱いことの反映である。

また、両校をビデオ通話で接続し、両校生徒は顔が見え、声も届く環境での交流を行った。生徒らは普段の学校生活や、津波避難に関する質問をし合った。そして、佐賀中学校での避難訓練から約 24 時間後、エヴァ・サマノ中学校でも津波避難訓練を行い、その映像をリアルタイムで佐賀中学校へ配信し、訓練が終了した。

5. エヴァ・サマノ中学校教員の変化

避難訓練実施から 4 か月後の 2017 年 11 月、フォローアップ調査のためエヴァ・サマノ中学校を再訪した。その際、教員が防災局に地震・津波対応のためのワークショップ開催を防災局に打診し実施されたこと、教員らを 5 つのグループに分災害対応班が設置されたこと、地震避難訓練が開催されたこと、地震時の安全な避難のために校舎の扉の位置を変更することを先生らが検討していることが分かった。

以上の事実は、同中学校が（他の学校以上に）地震津波防災に積極的に取り組み始めたことを物語っている。この理由として考えられるのが、同中学校における弱い主・従関係である。前述の通り、主・受関係が弱いことは、筆者ら外部の専門家から学校への指示・指導、校長から一般教員への指示・指導、一般教員から生徒への指示・指導、これらがうまく機能しないという意味では、たしかに否定的な影響を防災教育にもたらしている。

しかし他方で、この弱い主・従関係は、教育という営みが不可避に伴う、教えられる側の主体性の喪失という問題の解消に対しては肯定的な影響ももたらしうることを、この事例は示唆している。なぜなら、主・従の関係が弱いからこそ、校長（や他の教員）は、その後、筆者らの指導や予想を超えた自主的な工夫を防災活動に加えたのだし、主・従の関係が弱いからこそ、生徒たちは教員たちの制止がきかないほど日本の中学校との合同訓練で盛り上がりを見せたと考えられるからである。

参考文献：矢野智司（1996）、ソクラテスのダブル・バインド、世織書房。